



令和8(2026)年1月6日

校長だより Vol.11



「一富士(いちふじ)二鷹(にたか)三茄子(さんなすび)」～2026年も良い年にしましょう!!～

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひします。

新年最初の運試しともいえる「初夢」。「そういえば、どんな夢を見たか覚えていない…」という方も多いそうですが、みなさんはいかがでしょうか。「初夢」とは、新しい年を迎える前に就寝した夜に見る夢のこと。一般的には、元日から2日にかけて見た夢のことを指します。よく聞く「一富士二鷹三茄子(いちふじ・にたか・さんなすび)」は、初夢で見ると縁起が良いとされるものを順番に並べた諺(ことわざ)です。富士は「不死」もしくは「無事」、鷹は「高い」、茄子(ナス)は「成す」という言葉にかけられていて、由来には諸説あるものの、徳川家康が好んだ「富士山」「鷹狩り」「茄子」を順番に並べたという説が有力といわれます。

ちなみに、江戸時代の俗語などを集めた国語辞書「俚言集覧(りげんしゅうらん)」によると、この縁起物には続々があり、「四扇(しおうぎ)」「五煙草(ごたばこ)」「六座頭(ろくざとう)」という6番目までが控えているのだと。扇はおめでたい道具というだけでなく、未広がりであることから子孫繁栄や商売繁盛を意味し、煙草は煙が上のぼることから縁起が良いとされるもの。座頭は剃髪した琵琶法師の通称で、「毛がない」ことから「怪我ない」と変換でき、家内安全を意味するということです。

コミュニケーションの手段が変わっている。～味わい深い「手書きの年賀状」の代わりになるものは…～

年賀状は、日本の伝統的な年始の挨拶手段であり、そのルーツは古く、平安時代にまで遡ります。当時は年始の挨拶を手紙で行う習慣があり、これが後の年賀状の起源となりました。江戸時代には、特に商人や武士の間で重要なコミュニケーション手段として定着し、相手への感謝や新年の祝福を伝えるための大切な文化として、長い間日本人に親しまれてきましたが、残念なことに近年では年賀状離れが進んでいます。その背景として、デジタル化の進展やSNSの普及が大きく影響しており、特に若い世代では、メールやSNSを通じて新年の挨拶を済ませることが一般的になり、従来の年賀状を送る習慣が薄れています。また、年賀状を作成する手間やコストの問題に加えて物価高が続く中で、印刷費用や郵送費用が負担に感じられることも一因とされているようです。オンラインショッピングやデジタル決済の普及により、買い物の仕方も大きく変わりました。技術の進歩は、若者に限らずどの年代の人にとっても、よりシンプルで効率的な生活を求める傾向は強まり、生活スタイルそのものが一変しています。自宅で過ごす時間が増えたことから、リモートワークやオンライン学習が一般化し、家庭内の時間の使い方も変わっています。こうしたことから、年賀状を送る文化にも影響を与えており、従来のように手書きで心を込めたメッセージを書くことが少なくなった要因にもなっています。年賀状離れが進む中でも、新たな形での挨拶文化を育んでいくことが大切になりそうです。日本独自の文化を大切にしながら、新しい時代に適応した形でのコミュニケーションを考えていく必要がありそうです。人は人とのつながりなくして、豊かに生きていくことは出来ません。





二つの 10 万時間

知人のキャリアコンサルタントから、資格取得のための学びの中で得た、「二つの 10 万時間」という話を聞きました。まさに、“目から鱗（うろこ）”のような話でしたので御紹介します。

20 歳から 60 歳まで一日 10 時間の拘束（労働）。

一年 250 日間働くとして、40 年間で労働に費やす時間は 10 万時間。一方、60 歳で定年引退後、80 歳までの自由な時間を一日 14 時間、年間 365 日だと 10 万時間余り。つまり、職業人生 40 年で費やした労働時間と、定年後 20 年間で自由になる時間はほぼ同じだそうです。社会に出る年齢も違うでしょうし、定年が 60 歳の方もいれば 65 歳の方もいるので、一様にというわけではありませんが、健康でさえいれば、仕事をしていた時と同じくらいの時間が残されている、という見方が出来るわけです。人生 100 年時代に突入した、と言われます。もちろん、寿命と健康寿命は違いますが、80 歳以降の時間もまだまだあるわけですから、セカンドライフをどう生きるかは、人生の重要な課題だと感じました。

それは十分わかっているのですが。さてさて、どんな風に生きていきましょうか…。

これは、私が後に付け加えました。

「同じ星を見て歩いていきましょう！⑫」～人（生徒）は 育てたように育つ～

意識が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる

人格が変われば運命が変わる （運命 を変えることが出来れば 宿命 さえも変えることが出来る）

30 歳になった頃ですが、先輩教諭（指導者）から教わりました。甲子園にこそ繋がりませんでしたが、春季東海地区高校野球大会で、静岡市立商業高校（現駿河総合高校）としては初の県大会優勝を成し遂げ、東海大会では優勝した県立岐阜商業高校に惜しくも準決勝で敗れベスト 4 でした。当時私は部長として攻撃と外野守備等を担当していましたが、監督である先輩教諭は、オフシーズンとなる冬の鍛錬期に、一つ一つの練習に意味を解く際にこの格言を用いていました。私たちは初の夏の甲子園出場に向かって、選手一人一人に行動変容を求めました。（その夏甲子園に出場した浜松商業高校に敗れ、夢は叶いませんでした。）

私も監督の右腕として、生徒の行動変容を求めるならば、「まずは自分が変わらなければならない。」と、朝練の関わり方、自分の生活、言動を意識的に変えていきました。自分にとってとても大きな転機でした。

『これでいい』と思っていたことを変えることは本当に勇気が要ります。指導していたつもりが、選手に『ダメ出し』していただけで、選手（生徒）に『何でこんなことが出来ないんだ。』と掛けていた言葉は、出来ないままにしていた無責任な自分自身を映し出していることに気付き、本当に恥ずかしくなりました。

前号でも記述しましたが、私は先生方お一人おひとりの行動様式が、良い意味で変化していくことが、巡り巡ってその先にいる生徒たちの行動様式に、計り知れない良い影響を与えていくと考えています。

私たちの日々の振る舞い、言葉遣い、生徒への向き合い方。そうした一つひとつの「行動」は、意識の表れであり、やがて「習慣」となり、「人格」を形成します。そして、その「人格」そのものが、生徒たちにとって最高の「教材」となります。私たち教員も、生徒たちも、実にこうした普遍的な『原則』の中で生きているのです。生徒たちは、驚くほど敏感に、私たち大人の姿を見ています。私たちが自らを律し、学び続け、前向きな姿勢を示すことで、生徒たちは「未来への希望」や「努力することの価値」を無意識のうちに感じ取ってくれるはずです。私たちの行動様式が良い方向に変化すれば、私たち自身の「運命」をさらに輝かせるだけでなく、生徒たちの「運命」をも良い方向に導く力となるはずです。

